

沖の島の動物～酒井明 説話集29※～

沖の島の動物の話をしてみましょう。

島には大きな動物はおりませんが、植物同様めずらしい鳥の飛行などを見かめることができますので、これもまた興味深いことです。

藩政時代には大きなものもあったらしいのですが、その後姿を消したという人もあります。

面白いのは昭和24、5年頃だったでしょう。

猪が2、3頭残っているから退治にいては、ということを弘瀬出身の先生から聞いた事です。大型のケモノはいないといわれる沖の島。そこにまたどうして猪が残っているのだろう。

不思議に思って母島や弘瀬のお年寄りにいろいろ尋ねてみた所、なんと大正9年の大じけに話がさかのぼりました。

それまでは見かけることがなかったが、幡多地域全体をおそった大洪水で流された猪が島まで泳ぎついて繁殖したもので、山の畑もずい分荒らされたらしい。それでも、しし撃ちに島に入り込んだ人のおかげでやっと被害からまぬがれることができるようになったということでした。

洪水がどんどん島まで押し寄せるとはちょっと考えられません。

潮の流れに乗って渡ってくることもありはしないかと考えている矢先のこと、地元の人々が相談にやって来ました。

古屋野の浜のすこし沖合いで、波間を浮きつ沈みつしているものがあるので天馬船で近づいてみると、さほど大きくはないがまだ息のある猪。船に上げたが駄目というので肉にしたが、果たして食べられるか鑑定方として私を選んだという次第。

それより何より、土佐路から海に入ったか伊予地からか、その辺つかむことはしかねるが、とにかく海を渡ってくるものがあるという確証ともいえるものをその時つかむことができたのです。

猪にしろ、鹿にしろえらいものですが、それ以後そうした事は起こっていないようですが、離島といわれ目下そうしたものがおらないと確認される所でもいつまたすみつか、その可能性は十分に存在していることを忘れてはいけません。

※) 平成26年3月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。

